



矢筒城館跡

—長野県牟礼村矢筒城館跡遺跡発掘調査報告書—

1981.3

牟礼村教育委員会



矢筒城館跡

—長野県牟礼村矢筒城館跡遺跡発掘調査報告書—

1981.3

牟礼村教育委員会

序

矢筒城は今より460年位前の永正年間に島津氏の居城であったと伝えられ、多くの先生により研究されてきた。

この度山麓の一部が飯綱病院の敷地となるにあたり、県文化財保護審議会委員米山一政先生のご指導により緊急発掘をすることになった。

調査の結果、矢筒城は館跡を含めて一貫した矢筒城墟であることが初めて確認された。

この調査は既に病院建設を目前に控えて極めて窮屈した作業であり、末期には工事を開始されるような事態になり困難な調査であった。

しかしながら県の適切なるご指導と調査にあたられた諸先生の多大なるご尽力並びに村当局の深いご理解により、順調に調査実施の段階に入ることができた。

作業に際しては、この事態を知った多くの方々のお力添えがあり滞りなく本調査を終了することが出来た。

村のみなさんの暖かいお気持ちに対し厚くお礼を申し上げたい。

この報告書が矢筒城墟を偲び人々の声の響きの下に村の今後の発展に寄与することを願って止まない。

昭和54年12月20日

牛札村教育長 米澤竹志

矢筒城館跡調査報告にあたって

矢筒城の創始年代や、城主が誰であったか先輩諸氏が永年調査研究されたが、何分にも資料不足にて、確認出来ず唯古老の言い伝いで島津権六郎が居を構えたと云う程度であった。

歴史的に見ると、足利氏の勢力失墜、威令が地方に及ばずこの信濃国でも、守護の小笠原氏の勢力も地に整ち、従って、各地の名郷、名庄等の豪族達が何れも、独立状態になり家の子郎党を集め、勢力を張り大小豪族は自家防禦の必要上自領の小山等を利用し、城を築いた様だった。今、所々に残る山城は皆この時代の遺産だと云われて居る。

そこで本村矢筒山城もこの時代だと推定されるが、城主が常に山頂に居住して居たとは考えられず、然らば何處か推察では近隣の地名等考えて殿屋敷か古屋敷ではないかと想定して居た。

ところが今年7月頃の村文化財調査委員会の折り、矢野恒雄委員より城山の南斜面で病院建設予定地に館跡らしき痕跡が見られるとの話があった。

一方病院建設は9月中に着工されると聞き、このままだと遺跡が破壊される恐れあり急遽、村、県文化課と相談、指導により、この道の権威者の米山一政先生を煩し、下検分をお願いした処、確に館跡だと確認を得、直ちに下記調査会を組織し計画を樹て発掘に取りかかった次第である。

文化財調査委員長 小林幹雄

目 次

序 文

矢筒城館跡調査報告にあたって

第1章	矢筒城館跡の環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	3
第2章	調査	5
第1節	調査の概要	5
第2節	調査の動機及び構成	6
第3節	発掘調査日誌	7
第3章	遺構と遺物	10
第1節	遺跡の構造	10
第2節	遺構と遺物	13
1	遺構	13
2	遺物	17
第3節	中世の遺構と遺物	17
第4章	遺跡の性格	28
第1節	矢筒城との関係	28
第2節	館跡の性格	28
第5章	総括	32
第1節	山城と居館	32
第2節	矢筒山城について	34
第3節	矢筒城の歴史的背景	35
第4節	遺跡の今後の問題	36

第1章 矢筒城館跡の環境

第1節 矢筒城館跡の地理的環境

矢筒城館跡は牛札村大字牛札字城山の矢筒山（単に城山とも言う。）とその山麓に立地している。すぐ北側の牛札東小学校の位置で東経138度14分、北緯36度44分52秒海拔507メートルである。矢筒山の高さは北側の麓を流れる滻沢川の水面より74メートルで、牛札盆地のほぼ中央にある孤山である。

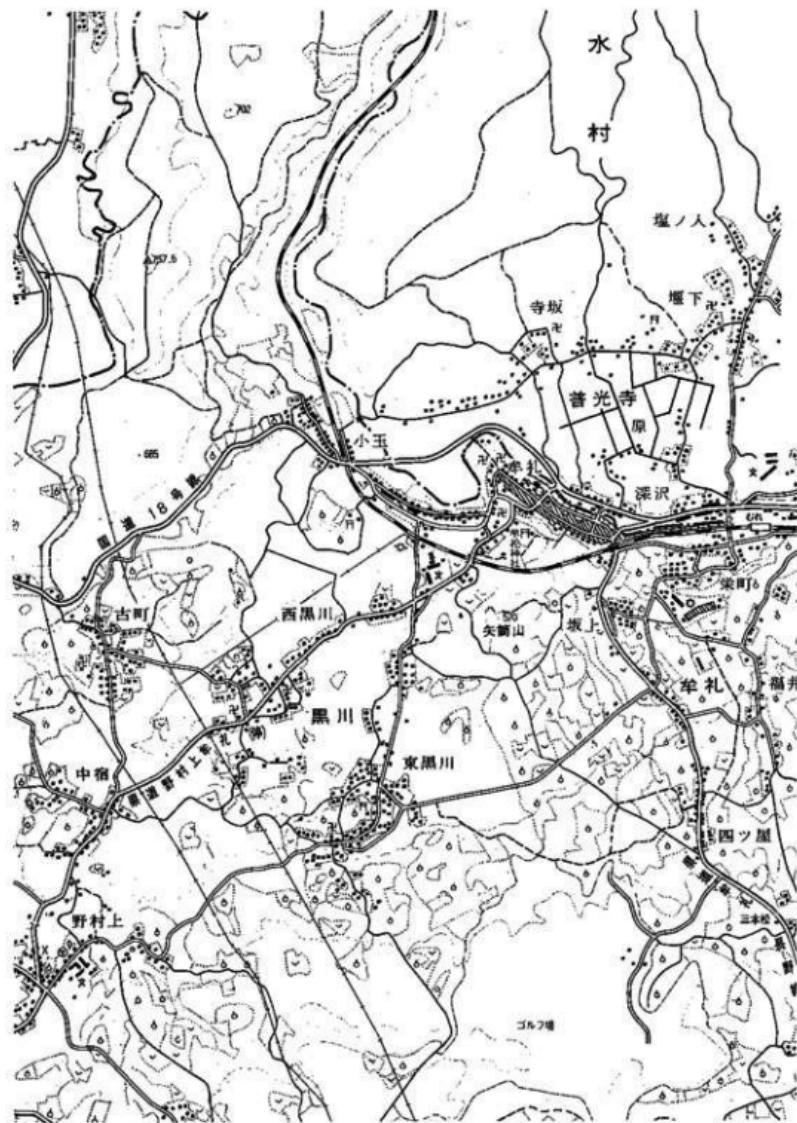
盆地は北は班尾山・西は飯綱山・南は三登山の各山麓に囲まれ、東は福井山の高原台地に連なっている。かつてはこの盆地は湖沼地帯であった。その証拠に東小学校前の座頭崖や、今回の飯綱病院建設現場においても、泥炭層を確認できる。

この湖沼盆地を戸隱山に発する鳥居川の解析で乾涸し、銚子口とも言うべき岩崎・釜淵の峡谷において、盆地の水は東方に流出して千曲川にそゝいでいる。鳥居川の支流である滻沢川は矢筒山の裏を東流し、これにそゝぐ八蛇川やその他の沢水は放射状をなして矢筒山の周囲に集まり、いわゆる七沢八谷の湖底盆地の地形を形成している。特に矢筒山の北側の斜面は滻沢川の解析で、著しく急峻であり、南方はなだらかな斜面をなしている。

気候上は善光寺平と信濃町富士里地区（上段と呼ぶ）との中间地帯で年平均気温は10.2度（三水村で測定）で、農作物も平坦地のものと高原性のものとの両方の栽培が可能で、その種類が多い。稻作は一毛作であるがその品質が良く、黒川米は江戸時代から名が知られている。近年果樹園芸が盛んとなり、矢筒山の南方大字牛札や大字平出地区では林檎・桃の生産が増加している。もともと矢筒山の南方大字牛札地籍には水田が少なく、沢の水や天水による水田が点在していたが、明治10年頃小向・横吹・五輪山地籍が開田され、溜池灌漑がなされるようになった。

矢筒山の裏の滻沢川と鳥居川にはさまれた地域には旧北国街道牛札宿の名残りをとどめる牛札本町商店街があり、信越線の開通とともに発展した駅前集落栄町商店街と一緒に牛札村の政治経済交通の中心地となっている。さらに近年三水村地籍鳥居川ぞいに国道18号線のバイパスが開通して勃興した三水村深沢商店街を含めて、これらの三商店街は両村の実質的な中核として発展の途上にある。

矢筒山の東方には日アス鉱業工場・旭化学工場等の近代工業が進出し、近村の余剰労働力を吸収している。さらにその東方福井地区には福井山住宅団地が県企業局の手によって、目下造成されている。また南方大字牛札前高山を中心としてゴルフ場が開設されており、遠くは飯綱東山麓の観光開発も着々進展するなど、牛札村はまさに大長野市の近郊農村のベッドタウン的な性格を強めつゝある。（第1図）



第1図 矢筒城館跡の周辺

第2節 矢筒城館跡の歴史的環境

天正10年（1582）3月5日松本左馬助等から直江与六にあてた書状に「御書籠みて拝見なし奉り、御塗に任せ、今日半札の地まで罷り付き…」とあるのが半札（大字半札）の文献上の初見である。寛永中（1625年頃）上平出（牛札村平出曾山の麓）から越後新井に移ったと言われる新井別院（後に半札に移り延念寺となる。）寺宝の裏書に「信州水内郡太田庄黒川郷平出願生寺」とか、半札徳満寺の蓮如絵像裏書に「水内郡柳原庄黒川郷半札宿徳満寺中、正安寺常什物也、天明2年8月」とあることなどからして、半札は平出等とともに太田庄黒川郷中であったものと推察される。

長野県町村誌にも半札村について「黒川村と一村たり。」とある。黒川の文献上の初見は半札より古く元徳元年（1329）2月、鎌倉幕府から信濃国の諸郷に課した源訪上社五月会御射山頭役の結番帳に、黒河（川）が島津宗久入道跡として登場する。したがって半札もこの頃から既に太田庄の島津領であったことは間違いない。

中郷村史には半札は古時太田庄に属し矢筒城主島津権六郎景秀が治めていたと記されているが、権六郎については単なる伝承である。天正10年（1582）7月上杉景勝が島津淡路守（長沼城主）に与えた朱印状地行方覚の中に、島津旧領として5百貫文半札、千貫文黒川郷、百貫文平出等があり、この年代においては半札は島津領であったことが明らかである。

平出・半札・黒川・小玉は善光寺平から越後に抜ける峠越えの地帯として交通上の要衝であった。延喜式（927）に信濃国駅馬として「麻積・日理・多古・沼辺各五疋」とある。現在多古の駅は信越線の三才駅の辺、沼辺の駅は信濃町の舟岳から水穴の辺と推定されている。したがって半札地区は多古と沼辺の中間地帯にあり、延喜の官道の通過地であると考えられるのである。

宝暦5年（1755）小玉村の高割水張（半札役場蔵）に見坂という地名がある。実地踏査してみると小玉坂（旧北国街道）から分岐して戸草に通じる山道があり、その途中に見坂平と見坂（みいざかと土地の人は呼ぶ）がある。筆者はこの見坂は神坂のことであり延喜の官道の峠であると思う。半札はこの峠越えの坂下としても重要な場所なのである。

戦国時代になるとこれらのルートは一段と重要性を増した。永禄4年（1561）上杉武田の川中島決戦後、上杉軍は曾山に撤兵収容した。永禄7年（1564）には武田方が野尻城をおとすなど、半札の矢筒城も当然通過地帯にあるため、一時荒廃したことが予想される。

次に半札神社蔵の交通文書として五つの重要文書があるので述べよう。天正11年（1583）3月上杉景勝は半札の奉行に対し「右信州越国往復の人民、横道を経ること、堅く停止せしめ畢んぬ。所詮半札より香白坂を直に長沼へ往還せしむべきの由仰せ出し、御朱印なさるものなり。仍って件の如し。」との文書を下し、半札から善光寺へ行かず、平出から香白坂を通って長

沼城下に行くことを命令している。

慶長5年（1600）松城12万石に封ぜられた森忠政は同7年（1602）景勝と同様に各務四郎兵衛宛に同内容の定書を下し、白坂を通って直に長沼へ往還するよう命じている。

次に慶長8年（1603）11月忠政の次に封ぜられた松平忠輝も前例を踏襲して平岡帶刀宛同様の定書を下している。かくて同15年（1610）高田城主となった忠輝は、同年9月21日、伝馬宿書出を、牛札町肝煎百姓中宛に出し、牛札宿は正式に発足したのである。

翌年慶長16年8月忠輝は越後より長沼への往還について横道通行を禁するため、山田隼人正・松平筑後守・松平遠江守・山田出雲守・松平大隅守・大久保石見守等の老臣の連署状を以って牛札百姓中に次の文書を出している。

「信州越国往復の商人荷は、牛札より香白坂を直に長沼新町へ往還せしむべく候。自然横道を経るの輩これあるに於いては、曲事たるべく候。今度坂中へ海道を明け、新田を発き申すべくの由、訴訟申上げ候と雖も、先例證文の旨に任せ、各談合せしめ前々の如く申付け候上は、新田をも発き、傳馬以下いよいよ油断なく相勤むべきものなり。」

以上からして牛札の地は交通政策上如何に重要な場所であったかがうかがわれる。

さてこの間慶長3年（1598）豊臣秀吉の命で上杉景勝は会津に移封され北信四郡の將士は百姓を残して皆これに従った。この時長沼の島津忠直は城を須田満義に渡し、会津仙道長沼に移り7000石と同心鎧3200石を領した。（上水内郡誌による）したがって牛札の場合も支配者の交替がなされ、それ以後は一国一城制により、矢筒城とその館は廃止となつたことであろう。

前記の慶長7年森忠政が下した定書の宛名各務四郎兵衛については、長沼村史に「慶長6年7月より慶長8年迄は幕府のお歳入りとなり、代官各務四郎兵衛が管轄した。」とあるが、これは同一人で長沼城の代官各務四郎兵衛が牛札を支配していたのである。また慶長8年大久保邦安が下した定書にある平岡帶刀については、牛札村史に「忠輝の臣下で松雲斎とも号した。」とある。さらに中郷村史には「牛札の証念寺の地に代官所があった。」とわずかに書いてあるが、現在証念寺の裏側には土星が確認され、その外側には曲輪跡の微地形もあり、まさに館の跡に証念寺が入ったと考えられる。慶長7年の各務四郎兵衛またはその家臣、そして慶長8年の平岡帶刀の時代には、証念寺の場所が政治の中心の館として使用されたものであろう。

そもそもこの場所は矢筒城館の裏町の一角で島居川に突出した河岸段丘上にあり要害の地でもある。時代の推移とともに平山城の館がこの地に移動し、この館を起点として東西に牛札の宿場作りへと発展していくとみるべきであろう。

第2章 調査

第1節 調査の概要

昭和54年8月、上水内郡牟礼村在住の長野女子高校教諭矢野恒雄氏から、矢筒城南側の地一帯はどうも居館跡らしいので、一応確認をして欲しい、との連絡が県教育委員会文化課に入った。

牟礼村大字牟礼字城山にある矢筒城址の居館跡は、残存する地名等からみて、その南東側にあるらしいという推測がなされていたが、未だ確認はされていなかった。たまたま本年5月から、文化財保存事業の一環として、県教委文化課が主体となり、県内の中世城館跡総合調査が開始された折でもあったので、指導者の米山一政氏、文化課指導主事白川武正氏とともに、8月30日該地を訪れ、地元関係者を交えて確認調査を行った。

その結果、この期の居館跡は城とかなり離れた所に立地するのに比して、矢筒城直下の2220～2224番地一帯が地面表からわずかに露呈している石積みや微地形等から推して、その主郭であることが確認された。飯綱山以北の地域には完全な居館跡が残っていず、その意味においても完全保存することが望ましい。しかし該地一帯は牟礼・三水両村組合立飯綱病院建設地として既に買取されており、その一部では工事も始まっている。主郭の個所も9月中旬にはブルトーザーで削平することに決まっていることからして、止むをえず記録保存のための緊急発掘調査に頼らざるをえない。

居館跡の確認から工事開始まで10日前後しかなく、はっきりした石垣の残っている2225番地は、りんごの収穫まで手をつけないという約束なので、それ以外の地において、この居館がどんな構造かその概要を確かめるほか術がない。

まず一面に生えている雑草を刈り、地表面を露出してから、土居と思われる南側と東側の石積みの線を掘り出すこと。東の石積みに対して垂直に2m巾のトレントを入れ、土里敷の確認、土壘の外側の堀もしくは郭の有無の調査。南の石積みにも南北にトレントを入れ、土里敷、大走り等諸施設の調査。大手と推察される南西隅においては、石積みを追って樹形の構築状況を調べ、更に東郭内においては、東西・南北にそれぞれトレントを何本か入れ、建築物の礎石あるいは柱跡等を確認し、生活上の遺物をさがすこと。なお、時間的余裕があったら、南東隅を発掘して構築状況を見たり、西側の石垣を精査し、どこまでが旧来のものであるかなどを確認することが急務と思われた。そして、限られた日数の中で、これらの諸調査が行われれば、居館の構築状況がほぼ概観できるのではないかと考えた。

そのため、急きよ調査団を編成し、9月8日から14日まで1週間の日程で発掘する、という文化財保護の立場から精いっぱいの決議が、地元当局の理解と協力のもとに行われ、上記の諸

調査が実施された。なお、調査面積は約4500m²、発掘に要した人員は調査員・作業員とも延130名に及んだ。

第2節 調査の動機（経過）

昭和54年8月長野県教育委員会より翌年3月31日までに中世城館跡分布調査の実施を行うべく連絡があり、城館の位置名称現状遺構の残存状況、城館に関する史料および研究史、城館に関する周辺遺跡および遺構の調査を行うよう指示があり、村内に既発見城館が3ヶ所あるやに報じて来た。

牛込村文化財調査委員欠野恒雄氏は以前より矢筒山東南山麓には城館跡があるのではないかと注目し、しばしば村教育委員会へ連絡していた。

たまたま飯綱病院が移転新築されることが決り、建設用地としてこの矢筒山東南山麓に建立されることとなり、工事のため9月にはこの地が全面的に破壊されることになった。

8月6日矢野恒雄氏の案内により文化財調査委員長、教育長、教育次長が実地に矢筒山東南山麓一帯（城山地区）を踏査し、城館跡らしいとの疑問を深めた。

8月30日県教育委員会文化課白田武正指導主事の来村をお願いし、米山一政・浅野井坦両氏により現地の調査を実施した結果城館跡であることが確認され、発掘調査の必要性が生じた。

病院建設が開始され既に入札も終了した建設工事にかかる直前の緊急発掘のため、その準備に当惑したが県及び調査の先生を囲んでの対策協議中に村長、助役、総務課長が揃って帰府し、合同会議をもつことが出来て発掘に要する予算もその場で内定し、調査が出来る明るい見通しとなった。

それに加えて県教育委員会の迅速適切なるご指導があり、又極めてお忙しい中を考古学の権威者である米山一政氏がこの調査に観意臨んでいただくことになったことは発掘調査が出来る最大の力であったことは申し上げるまでもない。

従って調査の先生のご依頼も順調に進み、村内皆さんの暖かい応援もあって順調に調査に踏みきれたことを特に銘記したい。

矢筒城館跡調査団(会)組織

1 村調査役員

顧問	金井義男	车礼村長	理事	矢野恒雄	文化財調査委員
"	原田幸衛	議會議長	"	青山紫朗	"
会長	小林幹雄	文化財調査委員長	"	井沢信雄	"
副会長	井沢 静	教育委員長	"	米沢稔秋	"
理事	白鳥 錠	文化財調査委員	"	丸山良雄	教育委員
"	上野 涼	"	"	小川専之助	"
"	白井健太郎	"	"	白石俊雄	"
"	武井 裕	"	"	丸山 久	公民館長
"	田中益男	"			

2 発掘調査團

團長	米山一政	信濃史料刊行会	調査員	綿田弘実	立正大学学生
調査主任	矢野恒雄	長野女子高校	"	望月 映	明治大学学生
調査員	浅野井 田	屋代小学校	"	大久保邦彦	長野建設事務所
"	森山公一	信毎書籍印刷	指導	白井武正	県文化課指導主事
"	小柳義男	松代小学校			

3 事務局

局長	米沢竹志	教育長	局員	近藤克彦	社会教育主事
次長	池内健造	教育次長	"	加藤みどり	教委事務員
局員	仲俣弥一	社会教育係長			

4 作業協力者

阿部千鶴	赤塙佐平治	池田秋治	伊藤いね子	金井房子	金井幸江
金井忠雄	神谷正一	清水一三	田村眞三	寺島 清	寺島喜巳子
寺島つや子	町田良治	松井はま江	松井もえ	加藤兼治	

第3節 発掘調査日誌

○9月8日(土)晴れ

9時より現場で結団式を行い、ただちに調査にかかる。地表に露出している石壁の範囲及び状態の確認を中心に、8箇所にトレントを設定する。第1トレントでは東側の石壁の外側で帶郭、段郭を確認し、須恵器、カワラケを検出する。第7トレントでは犬走りを検出する。

敷石中に茶白が混入していた。第8トレンチは南側石壁に沿って設定し、石臼、灰釉陶器を検出する。ほかに、内面黒色土師器が表面採集された。

午後4時より飯縄福祉センターにて、調査団と村教委の打ち合わせ会議がもたれた。

○9月9日（日）曇り後晴れ

都合により地元協力者の参加を得られず、調査団だけで全体測量にかかる。矢筒山を一名マムシ山と称するが、早くも特大のマムシが出現し、注意を新たにする。調査範囲外に及ぶ居館址全域を観察する。当初、城館に伴うものと思われていた北西部にある井戸は現代のものと判明する。農道の石積中より鉄滓を採集した。

○9月10日（月）曇り

昨日に引き続き全体測量を行う。東側の石壁の範囲確認のため、第2トレンチの掘り下げに着手する。南限は急傾斜面の手前であることを確認した。また、ヒズミをもって構築されていた。石臼2個を検出。大走りの範囲確認のため、第7トレンチを東へ延長する。第8トレンチも石壁に沿って延長し、これが北に曲がる部分が樹形と推定される。この確認のため、石壁に接するT字形の第9トレンチを設定し、土師質土器（内耳鍋？）の破片を検出した。

○9月11日（火）晴れ

全体測量を続行し、北側の空堀と石壁内部を終える。第2、第8トレンチとも昨日の作業を続行する。第7トレンチでは大走りの東限がほぼ館址中央であることを確認した。石壁内の遺構確認のために設定した第3トレンチの作業にかかる。西からA、B、C区とし、重機で表土を除去。確認の結果、A、B区からはピット群が検出される。C区からは土師器、中世陶器が若干出土する。また古代の住居址の存在が予想され、一部拡張した。

○9月12日（水）晴れ

第3トレンチの調査を進める。3区とも相当数の大小のピットが検出される。A区では小範囲の焼土1箇所を認めた。B区は北側の石壁下まで拡張し、ピット群がその数m手前まで分布するらしいことを確認した。C区の住居址と思われたものは土括と判明する。これを切る掘立柱建物址の一部が検出されたが、拡張の余裕はなく、残念ながらプランの全容はつかめなかつた。

第2トレンチでは石壁の北限を確認し、また南限付近の調査のため鍵の手形に設定した第5トレンチに着手したが、南側の石壁とは接続しないことが判明した。第9トレンチの東側に十字形に設定した第6トレンチを掘り下げたところ、礎石と思われる石組2箇所と、口径約1mで不整円形を呈するピット1個を検出した。全測は午後より続行した。

○ 9月13日（木）晴れ

調査は本日までの予定で、多忙であった。犬走りは清掃後、実測に着手。並行して全測を行し、南側の谷及び対岸までを実測して完了した。西側の石壁は第8トレントの延長と、北半部分に設定した第4トレントA～E区により、確認を終えた。かなりの作業が残り、1日延長してもらう。

○ 9月14日（金）曇り

午後3時まで協力者3名を手配してもらったが、多忙を極めた。犬走りの実測を続行し、第3トレントA、B区のピットを掘り下げる。業者から突然作業道路の設置工事を追られ、交渉の結果、午前中を該当部分の作業に当てることになった。このため急ピッチで犬走りと東側石壁の実測を完了する。午後、ただちにここに作業道路が取りつけられた。

10時より約1時間、米山団長を講師として見学会が催され、村民多数が参観した。見学者は午後まで跡を断たなかった。

午後4時に測量機具を除いて後かたづけが行なわれた後、調査員2名で作業を続ける。第6、第9トレントのセクション実測は完了したが、日没のため第3トレントは実測できず、作業を打ち切る。

○ 9月15日（土）曇り後雨

正式な調査期間は昨日までであったが、矢野主任が第3トレントC区のピットの掘り下げと各区の略測を行い、写真撮影した。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の構造

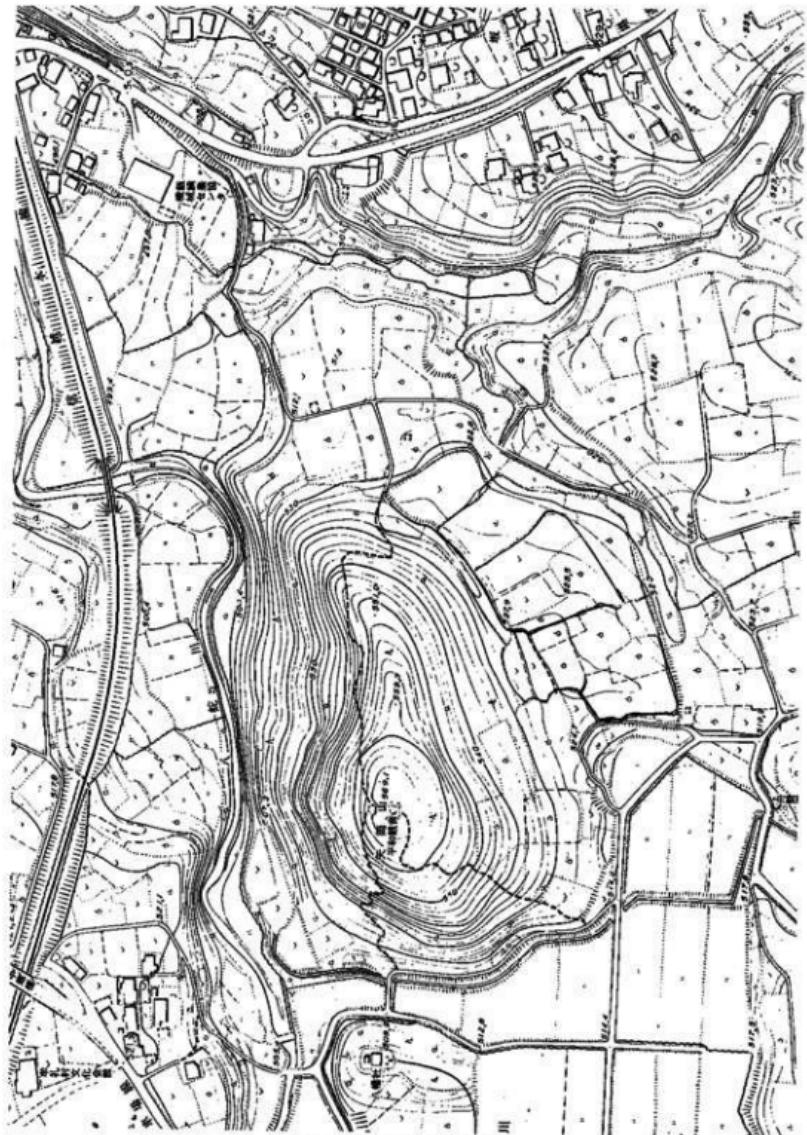
館跡は矢筒山を北に控え、南面した平地に構築したものであるが、その館としての機能を失ってから400年或はそれ以上の年月を経ており、その間に耕作が行われ、土地利用も時代と共に変遷があった。そのため館跡も耕地利用者等のために改変されて来たようで、表面上には館跡としての遺構を認める事のできるものは殆んどない状況となっていて、土地の人さえここが中世の武家の館跡であることも知らずに居たようである。(第2図)

以上のような次第であったが、矢筒山南側の地番2250・2252・2254にわたって続く空塗とこれに並行した土塁及びこの南方90及至110メートルに東西に走る空塗によって、この間が館跡であることが認められた。この館跡の東限・西限については明確を欠くが、西方は2245・2246・2247の地番の西が際立つて段落ちになり、且つ前記した館跡南部を限る空塗が2246番地の西南で終り、ここが堀尻となっているので、この3地番も館跡と見るべきものと考えられる。次に東限であるが、こんどの調査の結果2220番地の東端に南北に一直線に低いながらしっかりした石垣積みの根石と考えられるものが連続していることが明確になり、而もこの石垣積みの東側は際立つて低い段落ちになっていることが、トレンチにより判明した。ここが郭の東限であることは明らかであるが、この東の2218番地の南に狭いながら段落ちがあり、前記した館跡北方の土塁の東端がこの2218番地の北東で終っていたようであるから、この2218番地も館跡の一部と見られる。(第3図)

これ等に依ってみると、館跡の総規模は、東西190メートル(約105間)南北110メートル(60間)に及ぶ広大なものであったと考えられる。

このうち郭として規模及び遺構の最もよく残っているのは、2220~2224の地番にわたる地籍の一郭で、ここは北は前記したように土塁が東西に続き、これは南側(郭内)から約2.5米の高さで、土塁敷5~7メートル、馬踏(土塁上部幅)2メートル程である。西側は北から南方に向って土壁が続き、45メートルの地点からはその延長に東方に面を備えた石垣積みが約20メートル続く。この石垣積みはその面が一辺50及至6.70センチの大石が根深く据いてあって、当初の石垣積みの残存であらうと察せられた。この石垣積み南端から南15メートル、石垣積み延長から同様15メートル西からは東方に向って一直線に石垣積みが連なる。この距離約80メートルで、その南方との段差は1メートルである。この石垣積みの東端は前記した東方を南北に通る石積みと直角に交る。

この規模は北辺が50メートル、東辺が75メートル、南辺が80メートル、西辺も80メートルである。

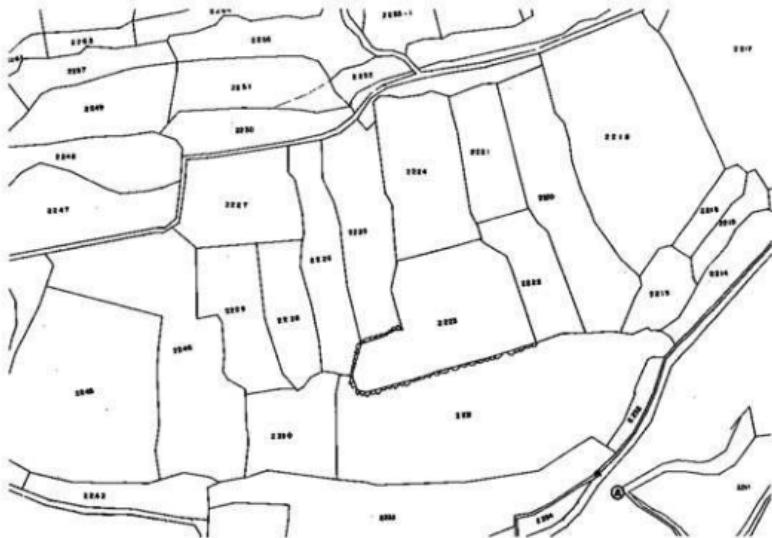


第2図 矢筒山城跡地形図

これに統いて西に地番でいうなら2225から2229の5筆を含む地籍は、これまでに記した地籍より一段高く、その形もほぼ矩形をなしてて、南北65メートル、東西55メートルある。その地形の上からはむしろ本郭に該当するように見取れる。但しここは調査の日程と該地が病院施設予定地外であるの故を以て、全然調査を行うことはなかった。これが本郭とするときは、前記の郭が一段低く、二の郭としても不自然ではないようである。

この仮称本郭及び二の郭をめぐって東方から2215・2216・2218・2219・2230・2231・2245・2246の8筆に及ぶ地籍は、東・南・西の三方をめぐる空濠の内にあるので、これ等は或は總構（外構）を見るべきであろう。ことに二の郭南方の石垣積み基部から約90センチ離れて、基部と並行して長さ26メートル、幅50~70センチの石敷があった。後世の農耕のためのものとは考へ難いもので、その用意は判断しかねるが、館使用時代何等かの目的のために敷設したものと考えられるので、前記した2215から2246番の地は三の郭と見て間違ないように思われる。

なお、南方の空濠は幅7メートル、両岸からの深さ2~3メートル、当時に比してかなり埋没しているように見える。



第3図 矢箇城跡地籍図

第2節 遺構と遺物

1 遺構

該期の遺構は第3トレンチより検出されており、ピット群、掘立柱建物址、土括がある。しかし諸制約のもとでは、これらの中世城館址以前のものと思われる遺構群は十分に調査する余裕がなく、遺憾ながら確認面での平面形を略測し、一部の掘り下げができたのみである。以下にその概要を述べる。（第4図）

本トレンチの層序は、表土（耕作土、I層）、黒色土（II層）、黄褐色土（地山、III層）の3層からなっていた。（第5図）

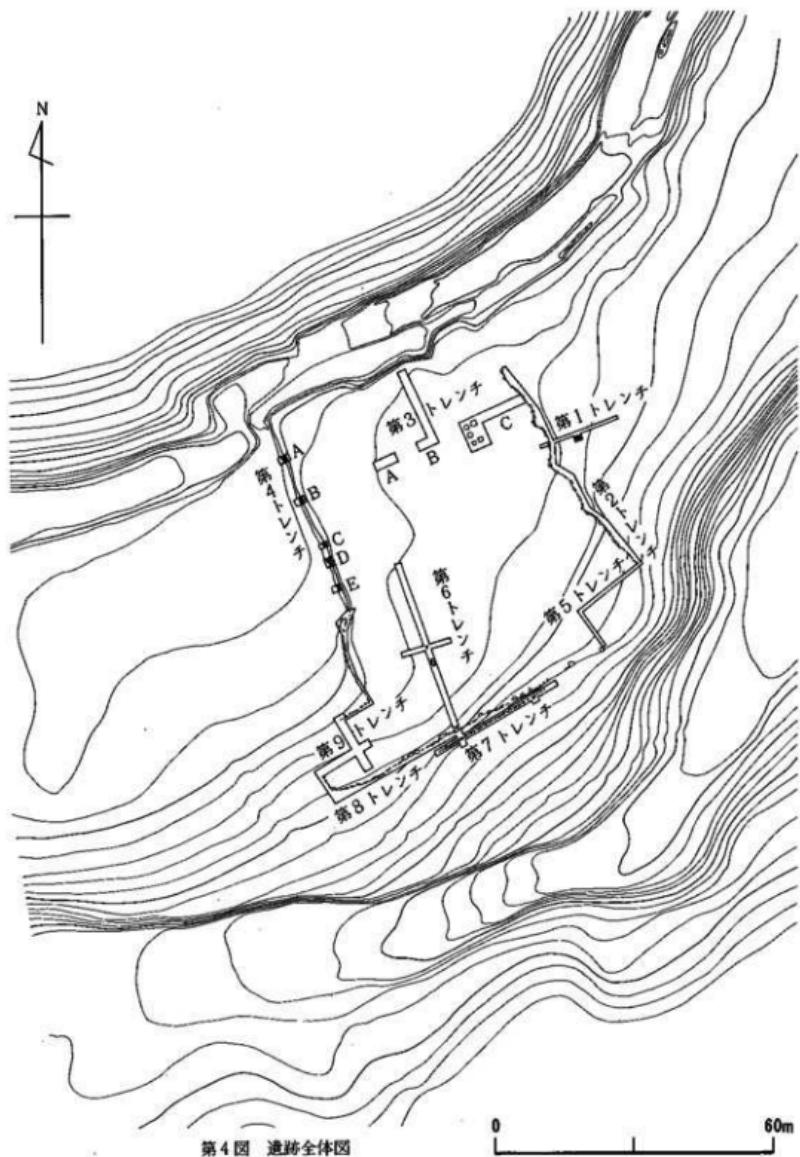
A区ではピット9個が検出された。形状は円形、方形、長方形があり、規模は径約80cm～10cm程度のものであった。西隅では径約100cmの範囲の薄い焼土が認められた。

B区ではピット31個が検出された。そのうち4個は石を有するが、底面に敷かれた状態のものはなかった。形状、規模はA区と同様であった。東端を北へ石垣際まで拡張したところ、石壘の数m手前までピットが分布していた。

C区からはピット21個、土括2基、掘立柱建物址1軒が検出された。ピットは円形が多く、径40cmを上回るものはなかった。土括は中央部と北壁下より検出された。前者はおよそ長軸185cm、短軸120cmを計り、北側がふくらむ横円形プランを呈する。掘立柱の1個によって一部が切られている。後者はトレンチの北壁に沿って一部が検出されたのみで形状は不明であるが、長軸は180cm以上であろう。これはII層上面からIII層まで掘り込まれたもので、覆土に黄褐色土のブロックを含む。掘立柱建物址はプラン全面を確認できなかつたが、西半分以上を構成すると思われる6個の柱穴が検出された。柱穴は1辺80cmの整った方形を呈し、等間隔に配列されている。縦に配列する3個を梁行とすればその規模は2間で約340cmを計り、主軸はN-25°-Wを示すことになる。（第7図）

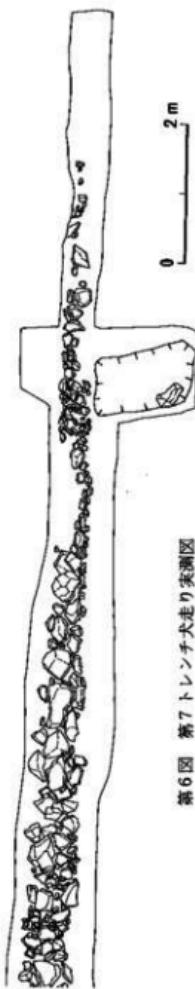
遺物については、C区から微量の土師器、須恵器片等が検出されたのみで、個々の遺構の時期決定の積極的な根拠とはならないが、平安時代をさかのばるものはない。また掘立柱建物址については、柱穴が大規模なことから中世のものとは考えにくい。

不十分な調査ながら、本遺構群は平安時代に属するもので、その内で時間差をもつものと考えられる。



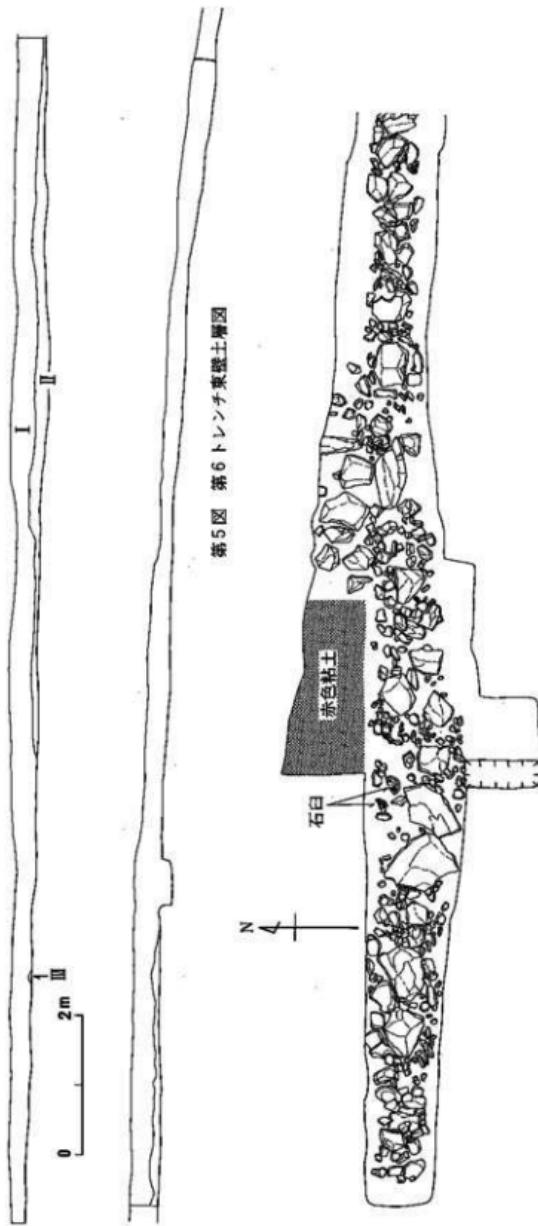
第4図 遺跡全体図

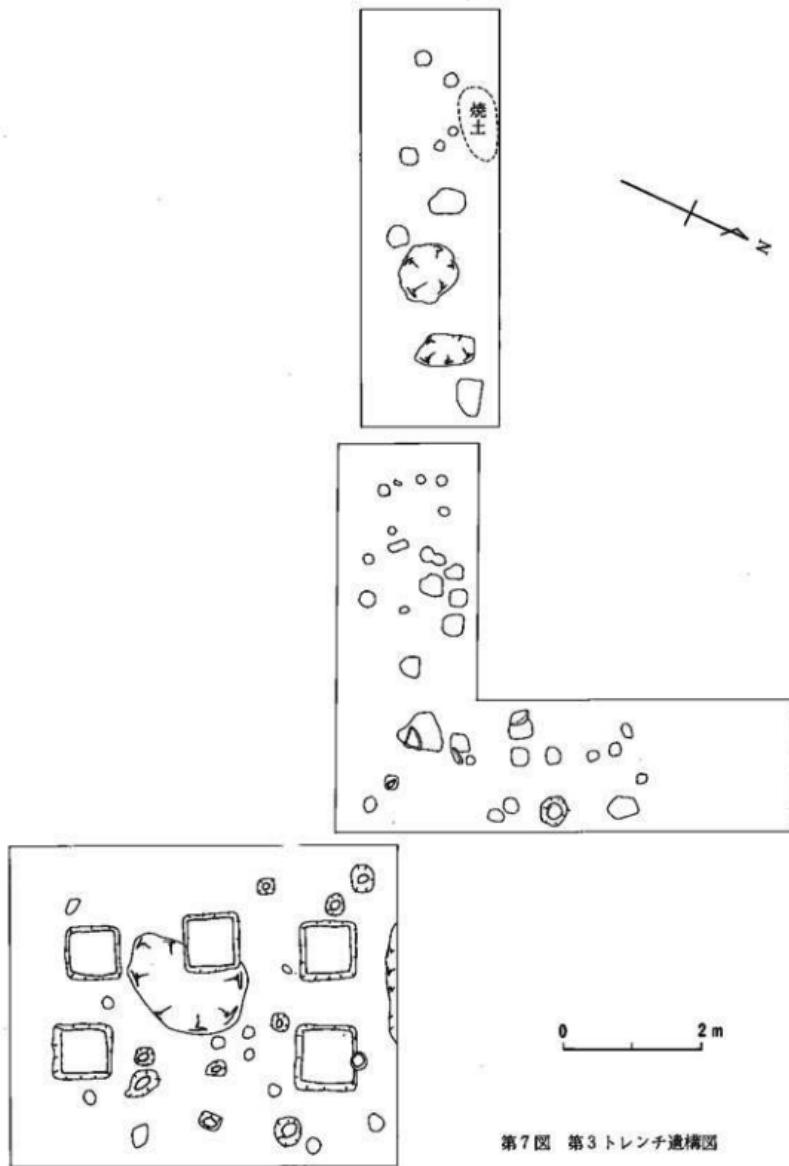
0 2m



第6図 第7トレンチ大走り実測図

第5図 第6トレンチ東壁土層図





第7図 第3トレンチ遺構図

2 遺物

土師器・須恵器（第8図1～9）

(1) 土師器

器形の明確なものは7の1点のみの出土で、口縁部分の小片がもう1点あるが、共に内面黒色のやや焼成不良の坏である。11世紀頃のものと思われる。第2トレンチからの出土である。

(2) 須恵器

5・6は長頸瓶の口縁部破片である。2点とも西側土手のEトレンチからの出土である。5は器形からみて、9世紀末頃のものであろうか。わずかに釉が残っている。6はやや赤味がかった焼成で、器形から10世紀末のものと思われる。8・9は須恵器の坏で、焼成はやや不良。図示していないが杯の口縁部分の小片が1点ある。10世紀ごろのものと思われる。1～4は須恵器甕の破片である。図示したものの他に小片が7点検出している。西側土手とCトレンチからの出土である。

第3節 中世の遺構、遺物

館跡は中世に構築し使用されたものであるから、当時の遺物が当然地下に埋没し残存するものと期待したが、全くの期待はずれであった。でも館跡内の全面発掘調査に依るときは、恐らく期待の幾分は得られたと思うが、調査員の手不足、調査予定期間が僅かの日時に限定されていたため、充分な成果をあげることのできなかつたことが惜しまれる。

この調査に於いて得たもののうち、注意すべきものは、茶臼の破片の多いことであった。茶臼は勿論抹茶を挽く臼で、現在使用する粉挽臼と同様石製で、やや小形のものである。

茶は京都建に寺の開山僧栄西が、建久2年（1191）宗国から播磨の時茶種を将来し、はじめて筑前（福岡県）背振山に植えたのを、明惠上人が京都梅尾に移し、これが宇治に移植されたものといい、栄西の喫茶養生記には

茶また養生の仙藥なり、延齡の妙術なり、

山谷に生す。その地神靈なり、人倫これを採るに、共に入いのちを長らうるなり。

と記し、その効能は精神を調え内を和げ、倦懈を除き、小便を利し、宿食を消し、酒を醒まし睡を消し、疾病を除き身を軽くするという。禪僧はこれを用いて座禅の睡魔を去るに利したのであって、武士階級もこれにならって、茶を用いたのであろう。中世の城跡ことに根小屋及び館には茶臼が残存するのが一般である。ここからは、東方の石垣積みの上にあり、西南の石垣積の上部に挟みこまれていた。勿論最初から石垣積みに挟みこんだものでなく、後世農耕の際に見出したものを積んだものと察せられる。

中世の遺物（第9図10～18、第10図19～31）

(1) 素焼き甕（第9図10）

あや杉文のある素焼き甕の破片である。横ナデ成形のあと内外面とも黒色研磨されている。中世末のものと思われる。信州新町牧之島城址からも同類のものが出土している。

(2) 珠洲焼（第9図11～18）

本館跡の出土遺物中、最も多くみられるもので、北陸系の遺物としての珠洲焼の大甕破片が18点検出している。主なものを第2図11～18に示した。いずれも14～15世紀ごろのものであろう。

(3) 土師質土器（第10図20～23）

第2トレンチ、西側土手からの出土で、いわゆる「かわらけ」と呼ばれる皿・壺の器形を有するものである。4点とも口縁部を欠失しており口径は不明であるが、おそらく口径8～9センチのものと思われる。

成形は、いずれも器壁の内外面をナデによるもので、底部は糸切り手法がなされている。いずれも、胎土によるものなのか、器面が磨滅している。あるいは焼成のちがいにあるのだろうか。他に小片で3個体分出土している。

(4) 内耳鍋（第10図19）

出土地点が明確でなく、残念であるが、1個体分出土している。器壁外面に煤が付着して、黒褐色を呈するもので焼成はよくない。成形は、器壁の内外面をナデにより、調製されている。やや内弯するカーブをえがきながら立ち上り、胴部上半部で一旦くびれ、さらに内弯気味のカーブをえがきつつ口縁部に至る。雲母・砂粒の混入が多くみられる。

(5) 陶器（第10図24・25、27～31）

a (第10図24)

皿か碗の底部で糸切り手法がなされている。胎土は黄褐色の美濃系である。黄褐色の釉がかけられている。

b (第10図25・30)

2点とも唐津焼の高台付皿の底部破片である。内面に唐津焼独特の灰緑白色の釉がけがされている。14～15世紀のものと思われる。

c (第10図27)

瀬戸系の灰釉陶器で、高台付碗の底部である。焼成良好の硬い焼きである。他に1点器形は不明であるが胴部の破片が検出されている。2点とも10世紀のものと思われる。

d (第10図28)

小形のオロシ鉢の底部破片で、高台がついている。高台はめがね底で、黒釉が施されている。オロシ部分は目の数11本で、施工後、黒色の釉が薄く塗

られている。胎土、成形等やや日本離れした器である。近世は江戸中期ごろのものと思われる。

e (第10図29)

美濃系の陶器で、黒褐釉の施された天目系碗のような底部破片である。赤褐色の胎土に内外面とも厚手の黒褐釉がたれる程にかけられている。

f (第10図31)

灰釉陶器系のオロシ皿の底部破片である。底部は糸切手法の後、軽くナデている。内面はナデ成形ののち、ヘラ状工具で3本単位の格子目にオロシ面を切っている。14世紀ごろのものと思われる。

胴部破片のため図示しなかったが、この他に常滑焼の大甕破片が1点(14世紀末)。美濃系の黒褐釉の甕破片3点(近世のものか)。瀬戸系の高台付碗の底部破片で、内面に黒褐釉が施されているもの1点(14世紀末)がある。

(6) 磁器 (第10図26)

磁器は小片が3点検出された。

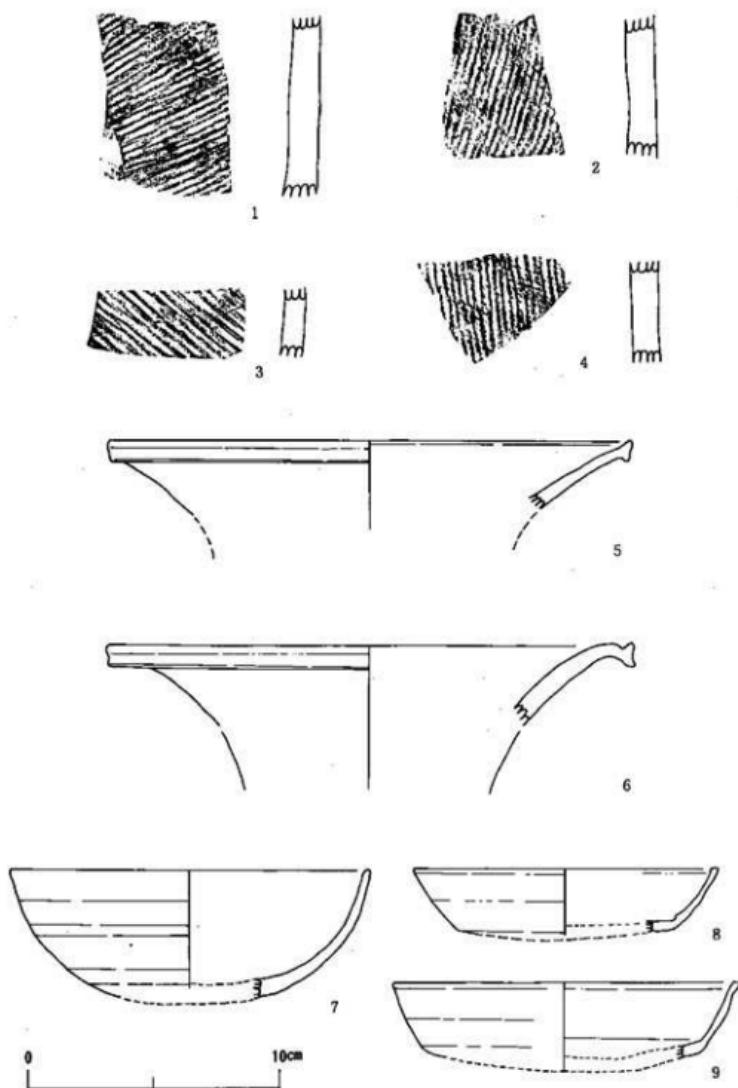
a 染付

26は染付の高台付皿か碗の底部破片である。のぞきに五弁花の窯印が描かれており、江戸中期ごろ伊万里焼かと思われる。

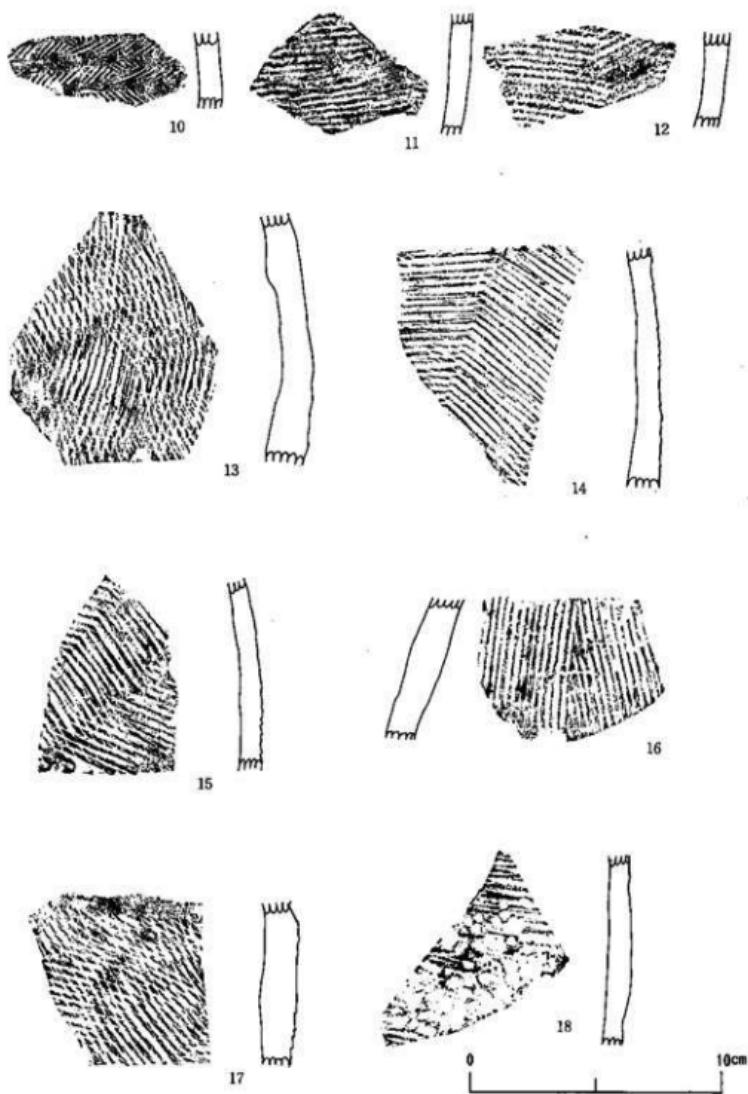
他に図示しなかったが、底部破片で高台の付いていた跡の残る碗の破片がある。

b 白磁

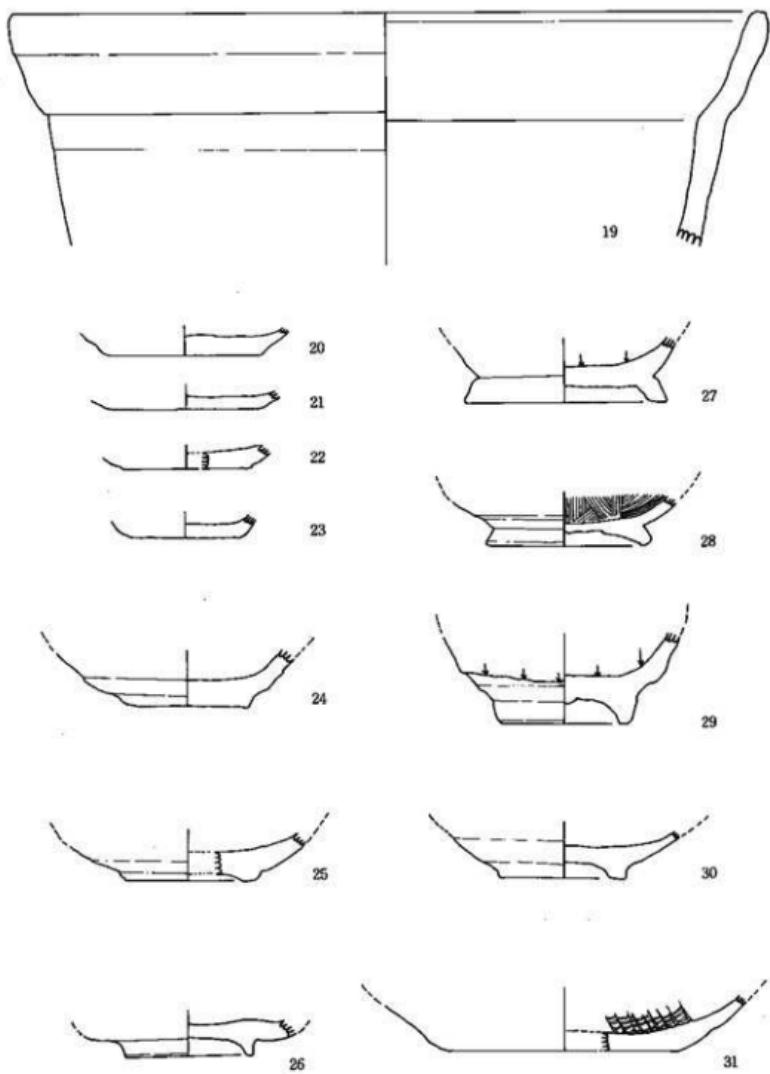
体部破片のため図示しなかったが、白磁の破片が出土している。8ミリメートルの厚さをもち、大形の器形をうかがわせる。茶色に近い白色で、油質の光沢をもつためらかな器面をしている。おそらく中国の元時代のものかと思われる。



第8図 矢筒山城跡出土遺物



第9図 矢筒山城跡出土遺物



第10図 矢筒山城館跡出土遺物

(7) 石臼（第11～13図）

1 石臼の構造

2つの円盤状の石に目が刻んである石臼は、その構造上、上臼（雄臼）と下臼（雌臼）に分けられる。上臼の上面にはくぼみがあり、回転することにより物が飛び出ないよう、若干の縁がつき、供給口の孔があけられている。上臼の下面是やや凹面をなし、目が刻まれ、下臼の上面はやや凸面をなし、目が刻まれている。

下臼の中央には芯棒孔が貫通しており、同じく上臼には芯棒受け孔があけられている。そして上臼の横には引き木を入れるほぞ穴があけられている。

2 出土した石臼（第11～13図）

矢筒山城址から出土した石臼は全部で14個体で、その全てが破片である。

大きく次の三つに分けることができる。1つは茶臼の破片と思われるもの。そして上臼と石臼である。

(1) 茶臼（第11図1～3）

1は受け鉢付の茶臼の破片と思われる。直径34.4センチ程で全体の8分の1を残しており、安山岩質である。

2も受け鉢付の茶臼破片と思われ、直径29センチで全体の4分の1程を残している。かどはまるみがつけられており、側面の下部からやや底部にかけてひろがるように思われ、あるいは石鉢の破片かもしれない。

3は直径18センチの上面のやや凹んだ形をしている。側面はやや丸味を帯びている。石臼というより、石鉢かと思われる破片である。

(2) 上臼（第11図9、第12図4、第13図5～8）

4、3分の1ほど残されている破片であるが、上場のクボはほぼ水平である。芯棒受けの孔が、下場にあけられ、ものくぼりの導入溝が刻まれている。目の単位は不規則で12から15本刻まれ、目の間隔も一様ではなくかなり磨滅している。6分画と思われ、直径は34センチである。

5、供給口孔とクボブチをわずかに残した10分の1程の小片である。直径34センチで上場のふくみ、下場のふくみが大きく2センチ程ある。供給口孔とともにくぼりの溝がわずかに見える。供給口の孔は上場の方から掘られたらしくのみの跡を明瞭に残す。4分の3程掘ったところで反対側から迎え掘りをしている。目の数は小片で不明であるが、11から13を数える。

6、小形の上臼で直径24.4センチで、全体の5分の1ほどが残っている。

下場のふくみは約1センチくらいで、供給口孔が貫通している。薄いので上場から一気に掘っている。クボブチの上面がやや丸味を帯びている。目数は不明で、孔近くの目は磨滅している。

7、全体の2分の1を残す上白で、中央に芯受け孔が残る。供給口孔は、上場から一気に掘り刻まれ、反対側から若干手直しのみが入れられている。上場のふくみはあまりないが、下場のふくみは3センチほどあり大きいが、やや片減りしており、下白との磨滅によるものであろうか。目の単位は10~12本で、6分画の直径30センチの白である。側面にヒキ木孔があけられている。

8、全体の3分の2を残す、直径29センチの上白である。上場のクボは中央部へ向って凹んでいる。下場のふくみは2センチで、側面は上方にいくほどかたむいている。ヒキ木孔が側面にあけられていて、孔の奥は掘りこんだのみの跡がそのまままで、平にしていない。目の数10本以上であろうが、磨滅がかなり激しい。4分画の白と思われる。

9、クボブチのきれいに残る、4分の1程の破片で、直径35センチと思われる。上場はほぼ水平であるが、下場のふくみは4センチとかなり反っている。芯受け孔があり、側面にはヒキ木孔が残されている。目の數十本単位で、6分画であるが、磨滅がかなり激しい。

(3) 下白（第11図13、第12図10~12、14）

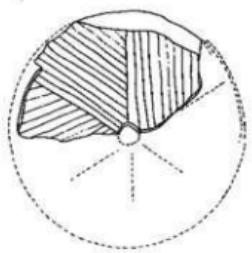
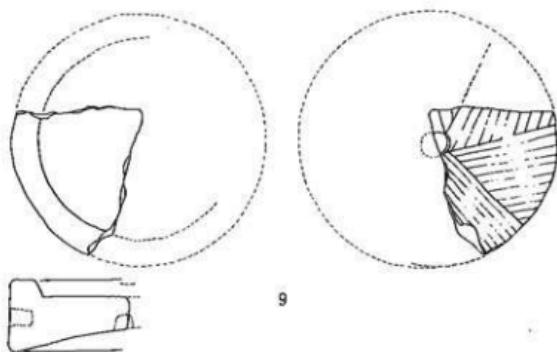
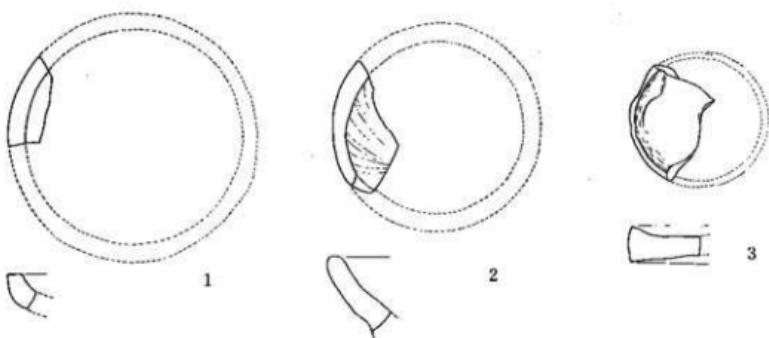
10、直径32センチで厚みのある下白で、わずかに上場に目を残す。目の単位その他の分画数は不明。下場のふくみは2センチ程ある。

11、全体の2分の1を残し、直径28センチを測る。側縁の破損が甚しく、剥落が多い。目の数は11~13本が単位で6分画である。芯棒孔は上場から掘り、下場から迎え掘をし、えぐりがかなり大きい。のみの跡が明瞭に残る。

12、全体の2分の1が残るが、破損が甚しく、剥落が多い。直径31センチで、芯棒孔は、下場から一気に掘られている。目の単位は10~13本で、6分画である。

13、全体の3分の1が残り、直径32センチを測る。側縁の破損が激しいのは他の2点と同様である。芯棒孔は下場から一気に掘られている。目の数は13本を確認するが、破損が大きく全体は不明。6分画である。

14、全体の2分の1を残し、直径34センチである。上場のふくみは13と同様に大きく3センチ程ある。目の数は11~12で、6分画である。

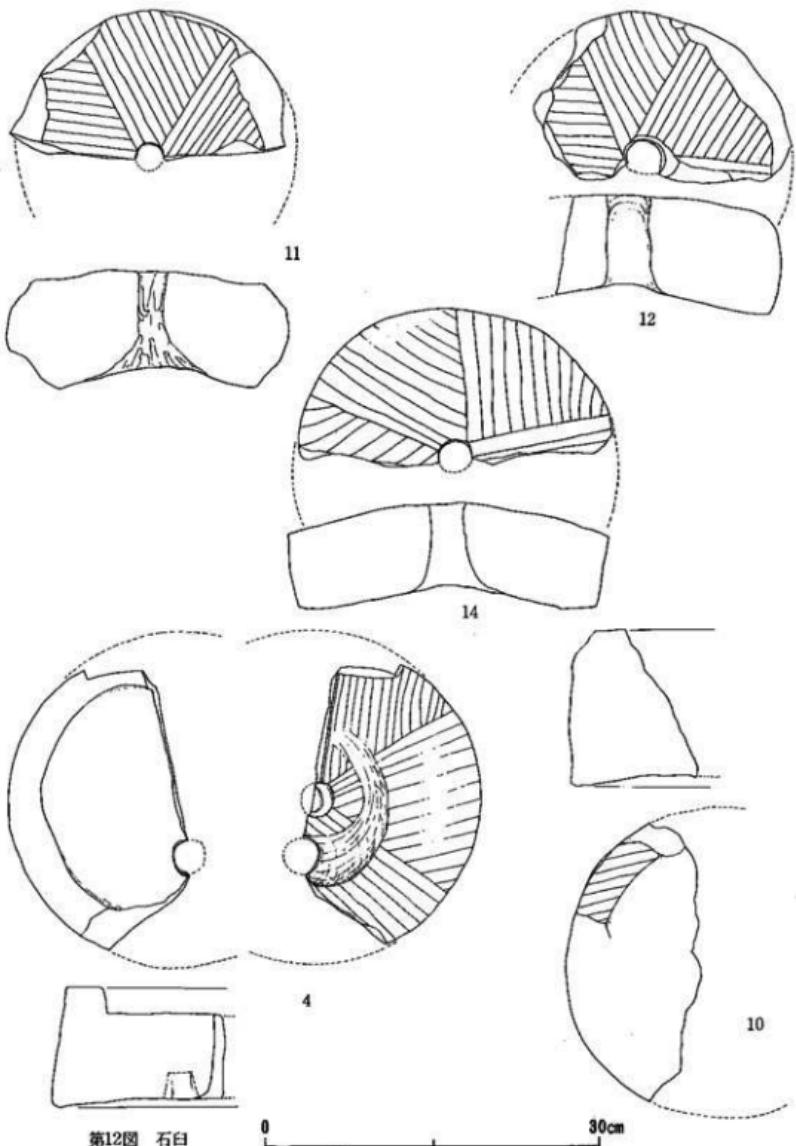


0 30cm



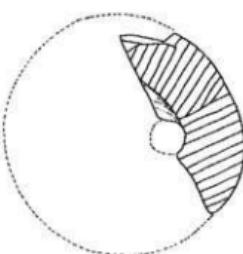
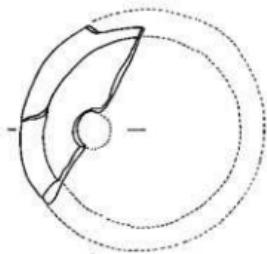
13

第11図 石臼

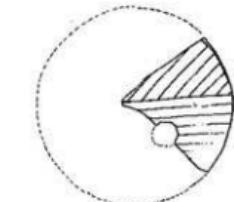
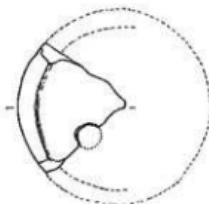
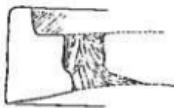


第12図 石臼

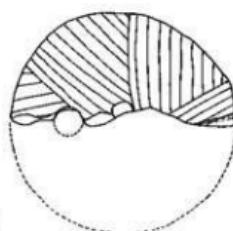
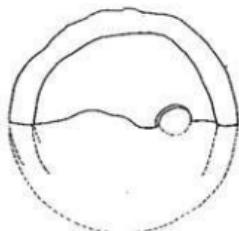
0 30cm



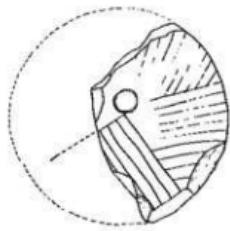
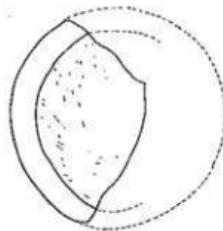
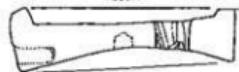
5



6



7



8



第13図 石臼

第4章 遺跡の性格

第1節 矢筒城との関係

矢筒城は東西512メートル南北380メートル周囲1,141メートル高さ74メートル（滝沢川面より）の矢筒山（城山）全体からなっている。頂上が本城、東部の一段低い地点が古城（小城か）とも言われ、大手と思われる枡形が東方より古城そして本城に通じている。中腹東面南面には数条の帶曲輪があり、北と西は天然の要害で急斜面である。

山の麓東南面は空堀によって囲まれ、その前面に東西約80メートル、南北約100メートルの館跡が確認された。さらにその外側は自然の谷と人工的な堀削によって外堀となっている。頂上の本城（本丸）の東角に井戸跡があり、本城と古城だけでも山城として独立して軍事的な条件を備えているが、麓の居館跡と複合した場合本格的な平山城を形成している。

皇国地志には「開基栄順信濃国水内郡武礼城士光井修理之介光信本願寺第三代日覚如上人の弟子となり、正安2庚子年（1300）賜榮順坊祖師聖人御染筆六字名号をいただき当国蒲原郡和納村上安尻稻場尻の地に草庵を建て…」と、新潟県、西蒲原郡岩室村和納願善寺住職光井智雄氏から報告を得た。つまり水内郡武礼城士である光井修理が越後の蒲原郡和納村に移り一寺を建立したのである。武礼城は牛込城つまり矢筒城に間違いないと思われる。正安2年は鎌倉時代であり、島津氏は室町時代の永正の頃であると言うから、光井栄順は島津氏以前の矢筒城主で、おそらく矢筒城の山城の時代の城主であろうか。

居館跡について中郷村史では「矢筒城主の常住地は想像して見れば、黒川の般屋敷あたりが連想される」とあるが、今回の発掘で訂正されねばならない。從来は矢筒城は単なる山城であると考えられていたが、館跡の発掘によって、山城とこれに伴う館跡であると考えられる。

第2節 館跡の性格

館跡のまわりには表町・裏町・古屋敷・七削等の地籍があり、これらは主に家臣の居住地で城下の町として人为的に形成されたものである。表町の一角を今も「おしゃごんじ」と呼んでいるが、これは社護神とか御社口と呼ばれるもので、一般的には、水の出る所などに祭られる原始開拓の神で大事な場所にあるものである。また小向・前高山・前坂等は館からみて、地形上地理的位置につけられた地名である。さらに館跡の周辺の古道と考えられる農道を地図上に表わすと、東西北南まわりの村々から道筋が集中して、本当に城下の町をなしている。

大字牛込の古名・古道・史跡復元図でもわかるように、城下の町の集落のあった名残りの遺跡

が多い。古宮・舟つなぎ石・地蔵堂・天の兎・山の神・古い墓地・本塚・五輪山の五輪の塔等等がそれである。



第14図 牛込の古名・古道・史跡

- | | | |
|--------------|---------------------|--------------|
| 1. 矢箭城館跡 | 2. 牛込の古宮 | 3. 舟つなぎ石 |
| 4. 地蔵院跡 | 5. 牛込神社 | 6. 証念寺(跡) |
| 7. 徳満寺 | 8. 観音寺 | 9. 表町のおしゃごんじ |
| 10. 地蔵堂の地蔵さん | 11. 駒爪の石 | 12. 横吹の天の兎跡 |
| 13. 五輪山の五輪塔 | 14. 梅の古木と柿の木(約300年) | 15. 古い墓地 |
| 16. 一里塚 | 17. 本塚 | 18. 行人塚の三本松 |

五輪山地籍の五輪山には五輪の塔が多数出土し牛札の旧良松寺跡と推察される。地蔵堂地籍には仕置場があったと言われ、以前ここに老松があり首切り松と呼ばれていた。今は三界可靈塔と地蔵尊が一基立っている。地蔵尊には「天正10年3月11日 南無阿弥陀仏、本阿弥陀仏」と刻されている。ここに昔お寺があり、後に牛札宿の成立とともに牛札神社の裏に移り地蔵院と称し、その建物は数年前まであった。

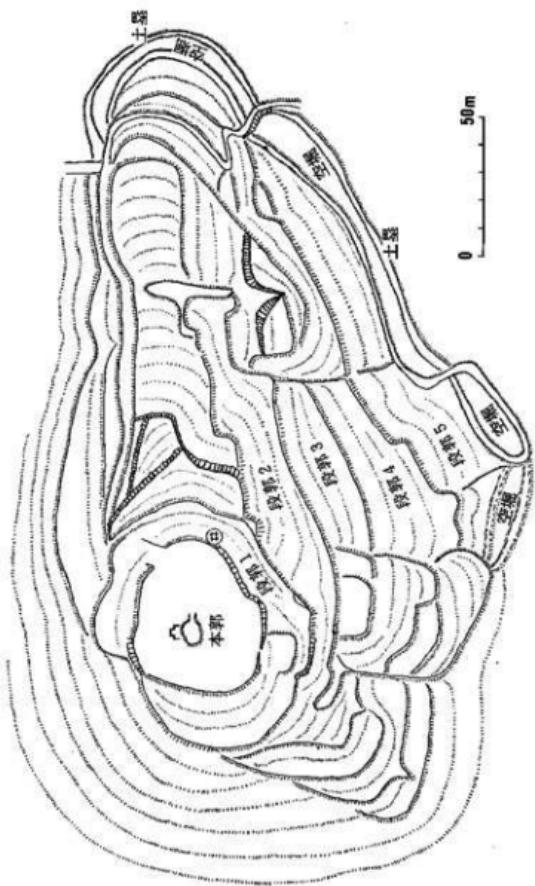
この天正10年の地蔵こそ矢筒城下の町の存立を示す唯一の動かない史料である。旧北国街道から分岐した道がこの西側を通り、矢筒の城下の町のまん中を通過して、小玉坂から見坂を通り戸草に向うルートにあたっている。これは北国街道以前の延喜の官道とも言うべき古道筋である。

文化2年(1819)黒川村牛札宿出作(矢筒城の南地区に出作)百姓總代から中之条御役所(天領の代官所)へ提出された牛札宿御伝馬出入願書の中に「平出村より当村に掛り小玉村に通じ往来候古往還在之…」の文言に相当する古道は、ほぼ前述の道筋であろうと察せられる。交通の中心である宿場が牛札の鳥居川の谷間に移り不便であるとの主張である。逆に言うと矢筒城とその館は交通上便利な位置にあったのである。

上平出に室飯道と呼ばれる地籍があり、上平出からゴルフ場を経て牛札に向う、古道筋が若干残っている。この室飯道の呼称こそ牛札の城下の町の重要性を語るものである。矢筒城館主の支配する領内は、館跡や城下の町の規模からみても、牛札村と三水村にある島津領全体の総括的な性格と任務があったのではなかろうか。

長野県町村誌には嚴星敷(黒川の)の直ぐ北側にある長谷寺については「島津権六郎の伯母某・菩提の為該寺へ移し、堂塔再建して玉林山観音院長谷寺と称す。」とあり、大字黒川の大宮神社については「矢筒城主島津権六郎尊崇し、除地高十貫文を寄附す。」とあり、大宮神社は矢筒城主のお宮の如く、矢筒城に相対しており昔は櫓部落から一直線に参道があった。三水村普光寺の性空山普光寺については、「永正年間室飯城主島津某氏大修理を加う。……弘治永祿年間武田氏矢筒の城を襲う。某氏縁を以て該寺に逃る。甲兵來りて之を焼く。」とある。普光寺岩袋の北に「古城」と言う耕地が基盤整備前にあったが、これも矢筒城主の家臣が住んでいたとの伝承があった。信濃宝鑑によると普光寺のお宮について「諏訪の社廟ニ倣ヒ勅請セシ名神ニシテ當郡矢筒城主島津氏の守護神トシテ…」といふ。また三水村倉井の与四郎屋敷について「往古同郡牛札村矢筒城主島津氏の一族島津与四郎定國大永年間故ありて此地に住す。末葉与四郎定一まで本村を支配すと云う。或曰、弘治中、武田氏本郡を侵すに至り、北越へ退き上杉氏に降ると云う。」(長野県町村誌による。)以上伝承的な記録ではあるが、矢筒の館跡は牛札村、三水村内の芋川庄以外の太田庄島津氏一族が、普光寺平から山の手に上がっての一つの根拠地の性格をもっていたものと考えられるものである。

第15圖 夷簡城跡略圖



第5章 総 括

第1節 山城と居館

人類がこの世の中に生存して行くにあたってその間にまず競争が起り、更にこれが燃じて遂に闘争となるのは必然的現象である。人類が部族をなし、団体生活を営むようになってからはいよいよその闘争も共同的となり、大規模なものとなって闘争が行われるに至ると、必然的に防禦の設備が必要になって来るが、この防禦上の不足を補うために、人工的の設備を用いたのが築城である。従って城とは元来は防禦が目的で、自衛の策を講じたものであり、退守的のものであった。

古く古文献に記載を欠いてはいるが、東北地方に残るチャシは土壘と空堀を以て防禦を施した居住地であるが、アイヌ語で城塞又は土壘の意であって、その多く海湖沼・河川等に近い丘陵の突端や丘陵の頂等にあるようである。また本州の西端や九州の北部にある古代の遺跡神達石も山陵丘陵の上に列石をめぐらしたもので、これには種々説もあるが、その一つに城郭説がある。それはとにかく、上代に於いて注目されるものは稻城である。これ垂仁紀5年10月の条に「忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也」とあって、通訳に依れば、収穫えず兼て貯え置きたる稻を苞ながらに積重ねて高く築けるなりと説いている。これ等は臨時の築城であったろうと考えられている。しかし我が國に城郭ができるようになったのは朝鮮半島に於ける百濟・新羅・高勾麗及び唐との長年に於ける戦の結果、百済人等の我が國に流入後来るものが多く、これ等の影響によって我が國に城郭ができるようになった。即ち天智天皇4年(665)帰化した百済人に長門国に城を築かせ、又筑紫に大野城を築かせ、同6年には大和国に高安城を、讃岐に屋島城を築かしめた。これ等は何れも朝鮮文化の影響によるものであることは勿論であるが、對外的防備のためであったと考えられる。

これ等城郭の構造等は今知ることはできないが、孝德天皇の大化3年(647)に設けられた渟足橋は臨時に設けたものとは異なり柵戸をおき占領地に於ける根拠地として、占領地を確保しようとした植民地經營というべきものではあったが、城柵の最も早い例である。その後北方に向けて幾つもの城柵ができ、東北の経略が進められて行った。

その後、承平天慶2年の乱、天慶4年の藤原純友の乱、平忠常の乱を記した中に城名をあげているが、何れも要害の地に設けられた居館と天険を利用した臨時築城程度のものであったろうといわれ、その構造等を知ることはできない。

築城が最も盛んに行われるようになったのは寿永、元暦の源平二氏の争乱以後であるようである。しかもこの頃の居館は多く要害の地に設けるのが一般的であった。治承4年8月源頼朝が伊豆の山木判官兼隆を攻めたときのことを吾妻鏡には、件の居所は要害の地にして、前途後

路共に人馬を煩わしむべきの間、彼の地形を絵図せめしめ云々と記していく。甚だ要害堅固の地であった如くである。また、当館は防備を施したものであって、平常は居館であり、事に際して更に防備を行った如くである。吾妻鏡に治承4年9月甲斐の武田信義が頼朝に応じて信濃に兵を進め、菅原者を伊那郡大田切郷の城に攻めようとした時、冠者このことをきき、恐れをなし戦わずして館に火を放って自殺したと記しているが、これは臨時館に防備を施したもので、館即ち城であったように見える。治承4年9月30日新川義重は、頼朝の召に応ぜず上野守屋城に引籠り軍兵を聚むと記し、同軍同年12月22日の争に上野守屋尾館に引籠る云々とあって、これも軍兵が籠った場合城といい、実は館に防備を施し軍兵を籠らせた場合城といった如くで、館と城とは全く別のものではなかったように受取れる。これ等の考证について例をあげれば多いが、今は省略に従う。

このやうに事あるに及んで居館に防備を強固にして敵の攻撃から自己及び一族の安泰を計ることも、社会的不安が増大するに及んでは、生活安定の施設として城郭の発達を促すに至った。即ち城郭の未曾有の発達は南北朝時代に始るといわれる。殊に山城の発達は著しいものであった。

南北朝時代に先立って、後醍醐天皇は早くから、武家政治を天皇親政の政治に戻そうと計られ、一旦は鎌倉幕府を討滅し公家政治が復興したが、建武2年北条時行の乱に乗じて足利尊氏が鎌倉に投って反旗を翻し、後に京都に投って持明院統を擁立するに至って、いわゆる南北朝の対立となり、諸国の豪族は或は武家方に属し、或は南朝方に属し、自家の利害を以って去就を決するに至って、国内は分裂割拠の形勢となり、互に攻争することとなり、このため城郭は未曾有の発達を遂げた。殊に山上要害の地を扼ぶにより、地形に応じてその綱張、構造を異にしたため築城の技術に於いても格段の発達した如くである。

建武中興に先立って後醍醐天皇の挙られた笠置城について、太平記卷三に、「彼笠置の城と申すは、山高くて一片の白雲峰を埋み、谷深うして万仞の青岩路を遮る、攀折なる道を廻って揚る事十八町、岩を切て堀とし、石を立て塀とせり、されば縱ひ防ぎ戦ふ者無くとも暁く登る事得難し」と記している。勿論笠置城は笠置寺があり要害の地であったからこれに挙られたのである。そして南北朝争乱以後、諸侯の武士は皆天然の地城を一つの城郭とし、これに人工の城塞を多く配置して、一つの城塞地帯を形成することが一般的となつたと考えられている。即ち本城を中心として他の多くの支城と相応して防禦することが普通となつたのである。南北合一後幕府の全盛時代となり、幕府と諸侯との戦であったが、幕府の衰微時代になった応仁文明以後は、諸豪族は我意に任せて他の弱少豪族の領地を併合してその旗下としたため、いわゆる戦国大名が生じ、弱少の地方武士はその傘下に入つて漸く家の安泰を計つた。そしてそれ等は小地を安堵される一方大豪族の防衛を義務づけられた。従つて地方に存在する山城はその規模等によって城主の力の大小を推しはかることができようかと思われる。

かくして応仁文明以後、山城はその数を増した。これ等山城はむろん平常の住居地ではなく、

必ず近くに館を設けてここに居住し、更に家臣団の居住する町屋をおいた如くである。これは自然発生的聚落と異なり、領主の意図により屋敷割が行われたため、可成整然とした区画割であったようである。地名などに依ってもそのことが窺われる。

第2節 矢筒山城について

矢筒山城とその館跡については、それぞれの節で記してある通りであるが、この城館跡は、山城と館が連接していて、中世地方支配の武士の居住のあり方を知る得難い遺跡である。恐らく他の地の豪族の平常生活の居館と有事の際に防戦の拠点となる山城とは、地形或は経済上幾分の距離的距離はあるにしても連繋したものであったことは想像できるが、矢筒城館跡のように城館跡が一体であった例で、そのまま現在見ることのできるものは少い。

矢筒館のことは第三章第一節遺跡の構造の所で述べた通りであるが、矢筒山城のことはこの山がこの地方では独立山として目立っていて、山上及び中腹にかけて人工の手が加わっていることが歴然としているため、その山容等から山城であることが注目されて、明治13年編纂の長野県町村誌牟礼村の部に、「村の中部に一孤山聳立「城山と云ふ」と記し、更に矢筒城墟として、

本村末の方に当れる孤山にして村の中部に聳え、西は黒川村地内を堀し、南は字表町に隣し、東は字西前板・古屋敷両字に達り、北は滝沢川を以て字久保田に界す。東西四町四十間、南北三町二十八間、周囲十町二十三間三尺、高さ二百二十間二尺六寸、登路二条、一は本村東の方字備後澤より上る、高さ四町四十九間五尺四寸。一は西の方黒川村界より登る。高さ二町二間三尺。籠の形をなす、依て矢筒の城と云ふ。峯嶺に至れば石壁猶存す。中段南の方空塹あり、下段に堀あと及び大手口と唱ふる所あり。此所の耕地を墾つ者古今銀鍋の欠、陶器の片われ等を得るもの往々有之。永正の頃島津氏居城、天文の頃是れを毀つと云う。嶺に石祠あり、同氏を祭ると云伝ふ。

と同城の概要を記していく、同山城の状況を知ることができる。

今更に、先年上水内都誌編纂に当って、委員の諸君によって実測したもの（附載参照）によると、矢筒山は卵倒半截形の独立山で、標高570メートル、南側館跡との高差約70メートルであって、城の本郭は西寄りの最高所にあって、南北44メートル、東西54メートルの円形に近い形で、中央に径8メートル程の高段があり、北西の一部と南部に石垣積が残り、そ周囲は同心円状に段差のある二の郭といふべき平坦面がめぐらし、その幅10~15メートルである。

二の郭の東方下りに石垣積みが二重にあって、その東方尾根上に南北方向の土壁の跡と考えられるものがある、その南中腹にも石垣積みが残る。山の中腹南方は数段の帯状の郭が下まで重なり、裾には南方及び東方に空塹がめぐらし、更に館跡と接続している。

第3節 矢筒城の歴史的背景

矢筒城跡については、長野県町村誌牛込村の項に記していることは前記した通りであって、同村誌の管轄沿革の部に、古昔不詳、「本村矢筒の城主島津権六領す、村上氏の幕下なり」と記して伝承では島津氏の山城であるとしている。従って今度調査した館跡また島津氏の居館であったことになるわけであるが、果してそうであったか否かについては研究を要するところであろう。以下これ等の問題について、知見の史料によって探究して見たい。

島津氏の始祖忠久が承久3年5月8日の鎌倉幕府下知状によって信濃国太田庄の地頭になり、その子孫が代々太田庄を領したことは島津家文書によって明瞭するところである。太田庄は神代(現豊野町)・津野(現長野市長沼)を中心した庄園であったが、後には庄域が拡大され、鎌倉時代末頃は、源方上官五月金頭役結番状によると、大倉・石村・吉村から浅野・黒河・福王寺・小玉・野村上辻をも太田庄内に包含させたようである。更に南北朝時代の争乱を経て、室町時代後半の足利幕府の衰微時期に及んでは、島津氏が他領をも侵し、これを庄域におさめて、一円領域した如くである。天文22年武田晴信(信玄)が埴科郡坂城の村上義清を攻めて破ったため、義清は長尾景虎(謙信)をたより越後に亡命した。この時島津忠直も高梨政頼・井上昌満・須田満国と共に義清と行を共にした。この事は景虎が弘治2年3月長慶寺の僧某に送った書状に明記してある。しかし、米沢藩の御家中諸士略系譜によると、島津尾張守忠吉は武田晴信に属したと記してあって、同家の伝来文書にも、永禄6年8月15日付けで、信玄の朱印を以て長沼の地下人を集めて長沼の地に居住すべきことを忠吉に命じているから、天文22年忠直は越後に走り、忠吉は武田方に属して長沼に留ったものと察せられる。この事は、天正6年7月27日武田家の奉行に差出した忠吉の子忠泰の知行目録に依っても明らかである。この知行には、本領分として島津領内西尾張部・夏河・福王寺・原敷郷があり、新恩地として蓮之郷・夏河・村山・長沼島・今富を列記し、各その知行分高を記している。中でも本領として夏河・福王寺(普光寺のこと)・屋敷郷があり、新恩地(武田氏からの給恩地)にも夏河があつて島津忠吉・同忠泰が牛込地方を領有していたことが判明する。

しかし、天正6年3月13日上杉謙信が卒し、景勝と景虎(北条氏)が家督を争うに至ったとき、武田勝頼は景虎を援けるため長沼に到ったが、却って景勝と和し、景虎が景勝に討たれて以後は、更に両者の間に和解が成立し、忠泰も景勝に属したようで、忠泰は天正9年には越中松倉城の守備にあたっている。

天正10年3月のはじめ、景勝は武田勝頼救援のため松本房繁等を信濃に出兵させたが、この時松本房繁等は牛込に着陣し、斎藤朝信・千坂景觀の来着を待って、その指図により行動しようとしたことからも察せられる。更にこの事は天正6年7月27日、忠吉の子忠泰(泰忠)から武田家の奉行今井新左衛門尉・武藤三河守両名に宛てて差出した知行目録に依っても明らかであ

る。これには忠泰の本領として島津領内分西尾張辺・夏河・福王寺・屋敷郷があつて、新恩地分蓮・夏河・村山・長沼島・今富をあげている。ここで本領としている夏河・福王寺（普光寺のこと）・屋敷郷とあることに注意したい。屋敷郷は矢筒館一帯を指すものではないかと考えられる。三水村普光寺の寺伝には天文五年矢筒城主島津権六郎景秀の弟景久出家して貞雲と称し、普光寺住持となり、これまで天台宗であった普光寺を浄土宗に改めたといい、天文22年信玄が村上義清を攻め村上氏の旗下島津景秀の居城矢筒もまた攻落さる。然も当寺が島津氏に縁あるによりその余族の潜匿を疑い当寺に火を放ち堂塔を焼失すといい、また黒川大官諏訪社は永正年中宣般矢筒の城主島津権六郎景秀、水内郡半郡を領するに至り、從来の例に倣って鎮守と崇敬し神領を寄せるとといい、そのほか神社等でも矢筒城の守護神である等と伝承するものが多い。而も等しく永正年中のこととするなど相一致していて、島津氏関係を伝えるもの多いのは、矢筒城の築城がその頃であったことを物語ると考えられる。

しかし乍ら、天正10年3月上杉景勝が武田勝頼救援のため松本房繁等を信濃に出兵させたが、この時房繁は牛札に着陣し、斎藤朝信・千坂景親の来着を待って、その指図により行動を起す旨を直江兼続に申送っているがこの時の牛札は恐らく矢筒城を指すものであろう。従って天文22年矢筒城は一旦は廃されたが、天正10年頃も一時的に陣城として利用されたのであるまい。この事については更に探究が必要である。

第4節 遺跡の今後の問題

先にしばしば記して来たように、本遺跡は山城と館跡が連接して存在していて、館跡を取り巻く地名の上から初步的な町屋すなわち城下町さえ形成されていたらしいことが想定される。いわば牛札村の初源的場所であるといえる。牛札村は古く室戸とも書いたようであるが、慶長15年、松城から越後福島城に移り、越後及び北信四郡を領した松平忠輝が北国街道を改修し、牛札村を伝馬宿に定めて新たに町作りを行った際、現在地に町割を行い該地に町屋等が移転したものと考えられる。従って矢筒城館一帯が牛札村の故地であるといえる。矢筒城は矢筒山頂にあって当初の形態がそのままということはできないが、よくその跡を残している。館跡は公共の施設建設のため、残念ながら今回その跡を一部没することとなつたが、これもさきに記したように調査も充分とはいえないものであったので、更に調査のできる部分の調査を行い、且つ整備して、史跡公園化をはかり、後世に残すことが今後の課題ではないかと考えられる。

図 版



矢筒城と鉢跡全景（南から）



鉢跡北側の土堀



矢箇城西北部



館跡西南部



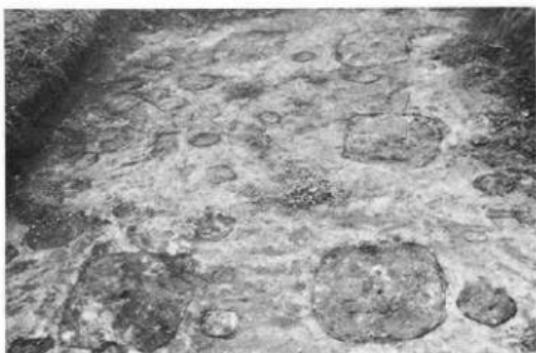
南の空堀（館の西南）



北の空堀（山城と館跡の間）



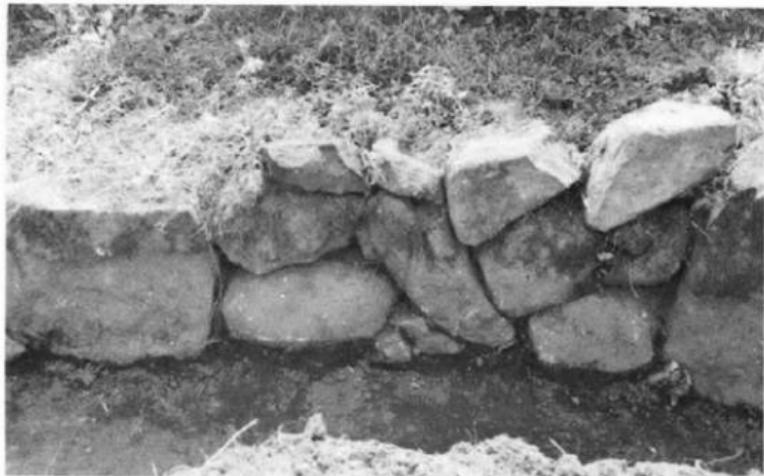
總跡全景



獨立柱狀柱穴一部



柱穴遺構



館南部の石積状況



石積みのコーナー



石積み列線

犬走り



全体



中央部



西より

第2トレンチの列石

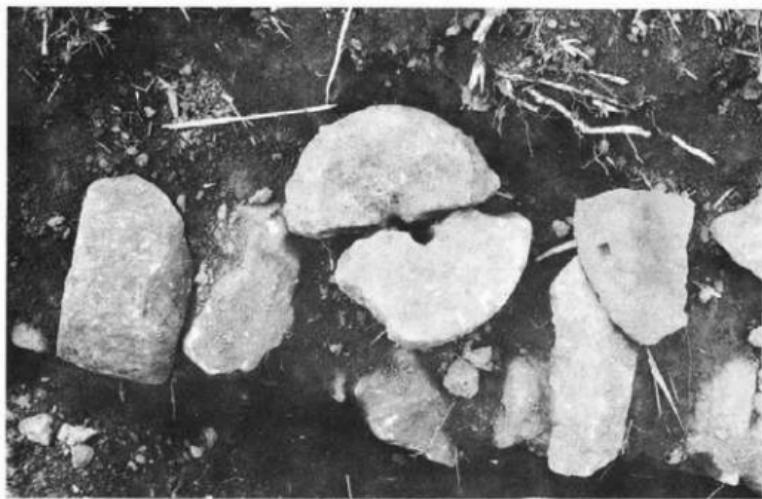


北より（石臼が積みこまれてゐる）





館跡東部土器及び列石



石臼出土状況

矢筒城館跡

昭和55年3月25日 印刷

昭和55年3月31日 発行

編集 矢筒城館跡発掘調査団

発行 丰礼村教育委員会

印刷 鬼灯書籍株式会社

